白山ふるさと文学賞

第十五回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生３・４年の部　最優秀賞

「おじいちゃんの思い出」

北陸学院小学校三年　谷（たに）　桜輔（おうすけ）

おじいちゃんの家の近くの、松任総合運動公園に、プラタナスという名前の、秋にとげとげした実を落とす木があります。30本ほど植えられている中で、僕は、少しはなれたところに植えられている少し背の高いプラタナスの木が気に入っています。

僕は3人きょうだいです。2つ上の姉と、2つ下の弟がいます。弟と僕をつれて、春も夏も秋も冬もおじいちゃんはよくその木を見せに行ってくれました。

ある少しはだ寒くなってきた秋の日に、公園で、おじいちゃんとそのプラタナスの木を見ていたら、急に、大つぶの雨が降ってきました。大急ぎで、そのプラタナスの木の下に、雨やどりしに走りました。そのとき、おじいちゃんが、小石につまづいて、そのプラタナスの木に手をつきました。すると、その木が「ぐらっ」とゆれて、一つ実が「ぽとっ」と落ちてきて、オナモミみたいな形のとげが、おじいちゃんのぼうしのつばに、引っかかりました。そして、今は、プラタナスの実を見ると、その時の思い出で、むねがいっぱいになります。楽しかったこと、つらかったこと、うれしかったこと、かなしかったこと、びっくりしたこと、おもしろかったことなど、おじいちゃんとの思い出がたくさんたくさん思いだされてきて、とうとう、泣き出してしまったことだってあります。

おじいちゃんは、僕が年長の時に天国に行ってしまいました。おじいちゃんがガンになってしまったとき、僕のおねえちゃんが「私が医者になって、じいじのガンを治す。」と言いました。おじいちゃんはうれしそうにしていました。でも、どんどんおじいちゃんの体調は、悪くなっていきました。ある日、おじいちゃんはママに言いました。「献体にとうろくしてほしい。」孫が医者になりたいなら、将来のお医者さんの役に立ちたいと言いました。お母さんが、「おとうさんが亡くなっても、娘はおとうさんのかいぼうはしないよ?」と言うと、「このたくさん病気したからだなら、きっと、医学を志す人の役に立つはずや。そしてきっと、孫のときも、だれかが献体をしてくれてこの子を医師にしてくれるはず。」とおじいちゃんは言いました。

僕が小学3年生の初夏、おじいちゃんの骨をかえしてもらう「いれいさい」におばあちゃんと、お母さんの弟と、家族5人の合計7人で行きました。僕は、骨と聞いて、とてもこわかったから、おむかえに行きたくないなと思いました。会場には、たくさんの、他の人の骨もあってやっぱりこわいなと思いました。見た目は全部同じだし、どれがおじいちゃんかもわからなかったからです。でも、お母さんの弟が、お骨を取って、せきにもどって僕のうでの中においたしゅんかん、僕がおじいちゃんをだっこしているんじゃなくて、おじいちゃんに僕がだっこされている気がして、しぜんになみだがたくさん出てきて、なみだが一時間くらいとまらなくなりました。その日のよるはゆめの中におじいちゃんが出てきて、20回ぐらいはおきてしまった。僕はおじいちゃんが大好きで、ゆうれいでもいいから会いたいです。

おじいちゃんとの思い出はたくさんあります。たとえば、お店で買ったおすしをおじいちゃんといっしょに食べたら、たっぷりワサビがついていて、おじいちゃんと苦笑いをしたことや、セミをつかまえて、おどろいたセミが飛びながらおしっこを僕とおじいちゃんの顔にかけてきたことや、水でっぽうを同時にうって、2人の顔にあたったりしたこと。その他もたくさんの思い出が毎日の生活の中でうかんで思い出さない日はありません。やっぱりおじいちゃんに会いたくなります。

僕の学校は、山の中にあって、自然ゆたかです。その中に、「プラタナスの木」もあります。その木を見るとおじいちゃんを感じます。プラタナスの花言葉は「天才」。おじいちゃんは僕に、「おうすけは天才やなぁ。」とよく言ってくれました。僕はちょっとどんくさいところがあって、うまくいかないことも多いけれど、おじいちゃんは、僕が自信がつく「まほう」の言葉をよくくれました。プラタナスを見る度

に、おじいちゃんの言葉とか、温かさとかが、ぶわっとよみがえって、僕を包んでくれます。はげましてくれます。

おじいちゃん見ていてね。僕は、がんばるね。大きくなって、きっと、「やっぱりおうすけは天才やったなぁ。」と言ってもらえるような、大人になるよ。うまく行かないことも多いし、ママにおこられてばかりだけど、見守っていてね。おじいちゃんに会いたくなったら、プラタナスの木を見に行くね。おじいちゃんがたくさんくれた思い出は大人になってもぜったいわすれません。

